ミシェル城館の人

争乱の時代

堀田

Yoshie Hotta

集英社

ミシェル 城館の人 ＊ 争乱の時代

一九九一年一月一〇日 第一刷発行
一九九一年二月一五日 第二刷発行

著 者 堀田善衛
装 画 廣瀬義男
装 丁 後藤市三
発行者 若菜 正
発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一―五〇
編集部 (〇三) 三二三〇―六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 三二三〇―六三九三
製作課 (〇三) 三二三〇―六〇八〇
印刷所 大日本印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1991 Y.HOTTA, Printed in Japan ISBN4-08-772773-4 C0093

ミシェル 城館の人

♧

争乱の時代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章

ミシェルは、一五三三年二月二十八日に、西南フランスの、ボルドオ市から東へ六〇キロほどのところにある、ギュイエンヌ地方のモンターニュ、あるいはモンテーニュと呼ばれる丘の上の、樅(もみ)の巨木の生い繁る城館に生れた。

父の名はピエール。ピエール・エーケム、母はアントアネットであった。

生れて数日後に、ミシェルは、城館の入口に導く小径のすぐ前にある、エグリーズ・ド・サン・ミシェルなる教会で洗礼を受けた。石の洗礼盤の上に、このミシェルを支えて洗礼を受けさせた者は、父でも母でもなく、領主としてのエーケム家に仕える、領内の小作人の一人であった。

領主としての父ピエール自らではなく、貧しい小作人の一人を長男の洗礼の立会人として、すなわち名付け親に選ぶということは、当時のフランスの習慣としては、別に珍しいことではなかった。一般的習慣と見做してもよいことではあったが、しかし、その後に生れて来た弟のトマや妹などは、身近な親族や、他の貴族仲間によって名付けられ、受洗をさせているところから見れば、そこに父親としての特別な配慮がなされていたと考えて誤りはないであろう。

モンテーニュ村は、今日現在でも、別して特別な村でも何でもなく、城館入口の正面にあるサン・ミシェル教会も、言うまでもなく石造の小さな、どこの村にでもあるあたりまえの教会であ

り、特別なことと言えば、側壁の前に、背の低い石碑が一つあって、ミシェルの横顔を刻んだ銅の浮彫りがはめ込まれていることだけである。石碑には、

ミシェル・エーケム・ド・モンテーニュの
栄光に寄す

と刻まれ、一五三三年、一五九二年という生年と没年が表示されている。それだけである。

生家の城館は、現在でも縦の巨木によってかこまれ、白い木柵の入口には、ただ MONTAIGNE とだけ書かれた白い小さな看板様のものがあるだけで、その入口からは巨木にさえぎられて城館そのものは見えない。その白い小看板の奥には、〝私有財産ナリ〟、とする "PROPRIETE PRIVEE" という、もう一つの掲示がある。それだけである。車で通りがかった人などは、おそらく見落してしまうであろう。村にはレストランもキャフェも何もない。

要するに西南フランスの平凡な一寒村であるにすぎず、たとえモンテーニュ家が並みの貴族以上に富んでいたとしても、その富がもっぱら領地から吸い上げられたものでなかったことは、一目にして瞭然である。

秋から冬にかけては、濃い霧があたり一帯にたち籠めて、音もなければ物の輪郭もぼやけてしまうという、いわば沈黙の世界に沈み込んで行ってしまうのである。筆者である私もまた、この村を訪ねて、濃い霧に閉じ込められ、三十分以上も立ち往生をしたことがあった。

城館の領域をとり囲む、石を積んだ塀も背が低く、たやすく乗り越えられる。この塀が四百年

前のそれと同じであったとしたら、あの宗教戦争の戦乱の只中にあった地としては、不可解なほどにも無防備であった。

ミシェルの家系について語るためには、まず三代前の、曾祖父ラモン・エーケムのところまで遡らねばならない。つい三代前の曾祖父のその名が示すように、この曾祖父は貴族でも何でもなかったのである。またこの三代以前のその前のことになると、事はもう西南フランス、ギュイエンヌの濃霧のなかに入ってしまって、ほとんど何もわからなくなってしまうのである。

エーケム（Eyquem）というこの苗字自体の発生にしても、やはり霧のなかのようである。もともと何等かの洗礼名が、いつの間にか姓として転用されて来たものらしいということしかわかっていない。

しかし、ともあれ、ミシェルの父方の祖先は、葡萄酒で著名なメドック地方からボルドオへ出て来て、まずメドック産の葡萄酒を扱い、ついで鮭その他の塩魚を他の地方へ売り捌き、トゥルーズを中心として生産される大青（パステル）の染料などにも手をのばしていた。ここでついでに言っておけば、この他の地方のなかには、イングランドもが含まれる。樽詰めの葡萄酒を陸路で五六〇キロも離れたパリなどへ送るよりも、海路ロンドンへ送ることの方がずっと手軽であり、便利でもあったのである。西南フランスは長くイングランドと深い関係をもっていた。他に低地地方のロッテルダム、ドイツのハンブルクなどとも頻繁な往来があった。

ボルドオをその中心として含むアキテーヌ地方は、一一五四年から一四五三年の、いわゆる百

年戦争の終りまでの三世紀の間、様々な出入りはあったにしても、イングランドの王の治下にあった。一四五三年といえば、ほんの八十年ほど以前のことである。

もう一つ事のついでに言っておけば、塩魚屋というものは、都市の住民にとってその魚臭のために、相当に迷惑千万な商売であったようである。エラスムスはその『対話集』で、魚屋に対して「塩魚屋よ、阿呆の臭太郎」と呼びかけさせている。

かくてボルドオの商人として次第に地歩を築いて行き、やがて「ボルドオの商人にしてブルジョア」という尊称をボルドオ市から与えられた。このブルジョアという呼び方、あるいは呼ばれ方は、一般庶民と貴族の間の、中間層を意味するだけのものではなくて、それは一種の、誇りとするに足る尊称でもあったのである。ミシェルの曾祖父は、やがて、すでにボルドオの大商人であった伯父のあとをついで、自ら廻船問屋、つまりは海運業者となった。ここで葡萄酒と塩魚と大青染料（パステル）は、前記の港の他に、アントワープ、ルーアン、リヴァープール、ダブリンなどへ送り出されて巨富をもたらしたと言われている。ドイツのハンザ同盟の諸港とも取引きがあった。嫁は市の高官の娘をもらい、この曾祖父夫婦の間に生れた娘は、貴族の家に、奥方として嫁いでいる。

商人・ブルジョアの娘が貴族に嫁いだとなれば、これはもう当の商人・ブルジョアにとっても、貴族の階段に一歩踏み込んだことを意味した。この結婚の式典の行われたと同じ年に、曾祖父は、百年戦争のために痛めつけられていた、ある旧貴族の土地と城館を買い入れた。但し、この旧貴族の領地は、すでにボルドオのある司教に譲られていたようである。従って曾祖父ラモンは、この某司教から土地と城館を買い入れた、と言うべきであるかもしれない。城館は荒れ果てて荒涼

たる有様であったと言われるが、要するに城館そのものよりも、領主であることの方が、ずっと重要であったのである。モンテーニュの地である。

かくて、エーケム家の人々は、各々の名のあとに、de Montaigne とつけて、領主であることを自称することが出来るようになったのである。

つけ加えておけば、Montaigne は古来モンターニュと発音されていたのであるが、土地の人々だけを除いて、今日ではモンテーニュと呼ぶことが普通になっているので、それに従うことにしたい。

新しい城館の主は、領地の小作人たちの忠誠の誓いを受けた。言うまでもなく、小作人たちは聖書に手を置いて誓ったものであった。聖書は、契約履行についての誓いのための道具でもあった。多くの異端派が、誓いのための誓いを拒否したのは、聖書を道具視することを嫌った所為でもあったのである。

しかし所領をえたからと言って、これだけで貴族たりえたことには、言うまでもなく、なりえないのである。これは、要するに第一歩であるにすぎず、曾祖父は新興の町人貴族であるというにとどまる。

新興のブルジョアが、直接間接に貴族の所領を買い取って、次第に、貴族の身分に成り上って行くということは、この当時として珍しいことではなかった。フランスの内側に領土を持ち、フランドルの毛織物業者と緊密に結ばれていたイングランドが、フランスの王位継承を目ざして攻め込んで来たことに端を発した、後世に百年戦争と称せられる無意味な戦争は、フランスに極端な疲弊と困窮をもたらし、多くの貴族たちがその領地を少しずつ手放さざるをえない結果をもた

らしていた。十四世紀の前半から十五世紀の半ばまで断続的に続いたこの戦争は、その終盤にジャンヌ・ダルクの活躍で、フランスがついに盛りかえして終りを告げはしたのであったが、大貴族は別としても、多くの中小貴族たちには、恢復不可能な打撃を与えていた。

しかし、領地を得て、その領地の名称を、自家の名のあとに付けて名乗ることが出来たからといって、それだけでは、もとより貴族とは言えない。王を、あるいは王家を頂点とする貴族社会という山脈(やまなみ)の、ほんの麓に達したというにとどまる。

いま王を、あるいは王家を頂点とする、と書いたのであったけれども、山脈の麓に達した程度では、王、あるいは王家と利害を共にすることなどは出来はしない。貴族社会といえども、それが利害によって結ばれたものでない筈はないのである。

領地を売った、あるいは失った貴族、あるいはその子孫は、おそらく旧領地の所有権回復の訴訟にうったえるであろう。この訴訟に堪える、または長い時間をかけて勝つという方法が、一つの道であった。この訴訟の最終的な裁決は、王の名においてなされるものであったからである。

そのためにはまた、近隣の貴族たちの同意と協力が必要であった。しかもそのためにも、貴族らしい物腰、態度、言葉遣いを身につけなければならず、子孫の教養にも気遣わなければならなかった。

要するに、第一には近隣の貴族たちから、貴族の端緒にとにもかくにも取り付いた者として認められることが必要であり、その次には、いわゆる世間一般と言われる社会からそれとして認められなければならない。

すなわち、昨日まで塩魚を売っていたなどという世間一般の記憶が薄められ、あるいは忘れら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

れなければならない。エラスムスに「阿呆の臭太郎」などと呼ばれないように、魚臭は早く抜けてくれる必要がある。が、このためには長い時間が必要である。少くとも三代くらいの時日を要するであろう。

更にもう一つの難関がある。貴族は、元来武人であった。商行為や職人業などは滅相もないという次第であり、されば領地を買い取ったというだけの町人貴族は、いまだ貴族としての階段の最低階に達した、ということであるにすぎない。

帯剣貴族でなければならないのである。剣を帯び、諸貴族の会合に列し、王の戦争に参加しなければならない。そうして王の戦争に参加するためには、その地方地方の宗主としての大貴族の封臣となり、その宣誓を何回か繰りかえしたという証左がなければならない。

かくて、帯剣貴族、あるいは武家貴族となるための捷径は、ということになると、十四、五歳の少年時代から古来の大貴族のもとに小姓として住み込み、そこで武士としての作法や武技を学ぶのがもっとも適当ということになるのである。それと同時に、四十年間にわたって、封地税なるものを王に貢納する必要があった。四十年が経って帯剣貴族らしさというものが、実質を伴って来たときまでの、王の側においての黙認料のようなものもが必要であった。それだけの財力もが必要であるということであった。

更にもう一つ、貴族の階段を踏み上って行くための道があった。それは司法職を手に入れることであった。司法職は、領地と同様に買い入れてもよく、世襲によってもよかった。これもまた捷径の一つではあったが、あまり幅のきくやり方ではなく、やはり領主として、なおかつ司法職を兼ねているという形の方がよかったのである。

われわれのミシェルの祖先、ここでは曾祖父は、子孫のために、これらの階梯のすべてを踏んで上昇して行けるように、着々として準備をしていたのである。

曾祖父が領地を入手した時に、その子、すなわちミシェルの祖父は、すでに成年をはるかに越していたために、武家貴族として身をたてるには時すでに遅すぎていた。いまさら大貴族の小姓になるわけにも行かず、貴族風な教育をうけるためにも、これまた遅すぎていた。

しかし、そんな必要もまたなかった。家業に孜々(しし)として励みさえすればよかったのである。一代や二代でどうにかなるほどに、簡単なことでは、やはり貴族の地位はなかったのである。またモンターニュ、あるいはモンテーニュの地にあった城館は、まだまだ荒れ果てたままで住むには適せず、修理には莫大な費用を要する。ボルドオ市は中世時代の城壁の外ではあったが、祖父は、ガロンヌ川の波止場に程近い、曾祖父の残した、倉庫や葡萄酒の醸造所などのあったラ・ルーセル街の二十三番地と二十五番地の店舗に身を置いて、商人・ブルジョアとしての身がために献身をしていた。「ボルドオの商人にしてブルジョアなる、名誉ある……」と署名をするところまで漕ぎつけ、領地関係の書類、あるいは証書類には「モンテーニュの領主にして、貴族たる……」と、実に堂々と署名をしている。階梯は一歩一歩昇って行くべきものであって、飛び越しは往々にして怪我のもとである。

ミシェルのこの祖父は、世にあまり類を見ないほどの商才と、商いの上での勇気、勇断に恵まれた人であったようである。船舶を所有しての廻船問屋ではなかったようであるが、船舶をチャーターしての貿易業者としては、曾祖父の上を行くものであったといわれている。自ら数々の船

舶を所有しての廻船問屋は、保険業の未発達な当時として、危険負担が大きすぎたのである。商社的活動のほかに、倉庫を所有して運送中の様々な商品、とりわけてスペイン、あるいはロンドン向けの香辛料を保管し、また牧場を経営して牛、馬を飼育しもした。更には、最初の領地を買いもとめた当の相手である、ボルドオの司教の領地からの諸税の取り立てを請け負ってもいた。

これだけでもおそらく莫大な収入をもたらしていたものであろう。ボルドオ市の内にも外にも、多くの不動産を有してもいた。ボルドオ高等法院からの依頼によって、スペイン王御用の胡椒の保管を引き受けていたことによる収入は、この稀少な商品からヴェネツィアの諸商人がどれほど莫大な利潤を得ていたかを思い出すだけで、想像されるというものであろう。胡椒は味付け用だけではなく、塩とともに、冷蔵設備のない当時として、腐りやすい肉類の保存にも必要であった。それは贅沢品であるだけではなくて、必要品でもあったのである。

見られるように、すでにボルドオの司教と高等法院が日常の折衝の範囲に入って来ている。すでにボルドオでの屈指のブルジョアである。その館の一部には小さな礼拝堂も設置されてい、敬虔な教会員でもある。市民からの尊敬と信頼が当然のこととして差し伸べられて来るとすれば、この次に来るものは、市政への参加要請である。市参事、法務主事といった、行政と裁判関係、あるいは法律関係の役職が呈されて来る。

妻は、ここでも見栄を張って貴族から迎えるというのではなくて、同じボルドオの大商人の子女からえらび迎えて、四男二女を儲けた。

さてしかし、ここまでは、ブルジョアとしての営々孜々たる努力である。

長男は、ピエールと呼ばれる。すなわち、ミシェルの父である。かくてこのピエールこそは、

貴族そのものにならねはならない。そのためにこそ一世紀近くにわたっての努力か積まれて来たのてある。しかも、ここて注目すへきことは、このピエールのみならす、その他の子女たちもか、ボルトオのラ・ルーセル街に於ててはなくて、その出生誕生かすへて領地モンテーニュ村の城館に於ててあったことてある。ボルトオの商館に於ててはなくて、領主としての城館に於て生誕を迎えさせているというところに、領地の住民たちに対してと同様に、近所近在の貴族たちにも、子女か貴族として生れたものてあることを認知させる必要かあったことか窺われる。

かくてこの祖父は、輸出入その他の業務を全的に管理し推進しなからも、次第に廻船問屋の店先から身を引きはしめ、その当時の国王フランソア一世の惹き起した、諸々の無用な戦争による王国の極度の疲弊と、悪税によって、領地を手放す小貴族たちの地を、次々と入手して行った。

かくて、ミンェルの未来の父である、長男ピエールは、これまての商人としてのこの家の太い絆を、一気に断ち切るようにして、商業業務には一切つかないようにせしめられるのてある。それは現代の常識からは考えにくい処世と思われるてあろうか、時代の上昇気流がとこにあり、とこにないかを考えるとき、勇気のある決断と、やはり言うへきものてあろう。

輸出入その他の業務は、他の子女に任せることも出来る。次男以下は、裁判官なり聖職者なりにして貴族の家としての体裁をととのえさせ、その上て、これらの次男以下に家業の管理をさせて行けはよいという、経営体制か成立するのてある。

学齢に達した父ピエールは、領地からボルドオの家に移り、人文学院と称された市立の学校の小学部に通ったと考えられている。しかしこの当時の学校というものかとういうものてあったか、これもあまり明らかてはない。一般に子供たちか上級に達すると、そうすることか出来る父兄た

ちは、子供をパリへ送ったもののようである。パリには多くの学院（コレジュ）なるものかあり、ここて一般教育、あるいはラテン語をも含む、文法、論理、修辞学、算術等々基礎教養をえさせられて、その後は、聖職者を志す者は、パリ大学の、その名声において、あるいはその悪名においても、ウァティカンに匹敵するソルボンヌの神学部へ進み、他方たとえは法律を身に付けようと思う者は、トゥルースへ、医師志願者は、南仏のモンペリエへと散って行ったもののようてある。

父ピエールのパリにおける修学も同し道を辿ったものと思われるか、これもあまり明らかてはない。ラテン語て詩を一つ書いていることかわかっているようてあるか、果してそれか自作のものてあるかとうかは、結局わからないことに属する。

しかしとにもかくにも、この父の三人の弟たちは、法学士の称号をもっていたというから、長男ピエールの教育も杜撰なものてはなかったろうとは推察されるのである。

その学問の内容は別として、パリにはボルトオたけてはなくて、この市を含むキュイエンヌの著名な貴族たちの子弟か、こぞってという言い方をしてもよいほとに、同しく留学して来ていたのてあるから、彼等との社交、交際の方かはるかに重要な事柄てあったてあろう。上流貴族社会ての物の言い方、振舞い方、つまりは作法習慣を知り、彼等にひけを取らぬところまての、貴族としての習熟か何よりも大切であったのてある。魚臭はすてに抜けていたてあろう。

更にはまた、ここて詳説することは避けるか、当時のヨーロノパ、——目のこく粗い笊（ざる）てすくうとして——ドイノ皇帝にしてスペイン王てあるカール五世と、フランス王フランノア一世と、海峡を隔ててのイキリス王ヘンリー八世と、これにかてて加えてのローマ法王との、この四者に

よる目まくるしいはかりの抗争と妥協、戦争、休戦、再戦争なとのことを、思想上の問題としての、カトリノク教と、擡頭しはしめた福音主義派のプロテスタントとの、単なるイテオロキー闘争にはととまらぬ抗争等によって編まれたタペストリーの、その中心の一つかパリであったことも勘定に入れられなけれはならないてあろう。しかも歴史的時間としては、後世によって〝ルネサンス〟と呼はれるてあろう時期にもあたっていたのてある。

パリは王室を中心としての政治都市てあると同時に、パリ大学神学部を中軸とするイテオロギー都市てもあった。

そうして以上の粗筋を上部構造とするならは、下部構造としてのフランス社会は、実は、王室を中心とする大貴族たちを除けは、貴族たちもまた貧しく、度重なる戦争によって家郷を長く留守にせさるをえす、民衆はまた教会からさえも課税をされて極度に圧迫されていたのてある。そこに中間層としての商人・ブルジョアの活動すへき余地か出て来て、この新興フルンョアジーは、精神的エネルキーの源泉としてのプロテスタンティスム、宗教改革者たちのイテオロキーを受け入れ得る素地をなしていた。しかもカール五世もフランノア一世も、またイタリアの諸侯も、さらには、これらの闘争に超越して存すへきローマの法王までか、戦争をほとんと彼等の日常業務のように執り行い、あたかも彼等の娘や婿をやったり取ったりするのと同し様に、敵と味方はほとんと数年毎に入れ替って、農村や諸都市は荒れ放題になっていたのてある。

エラスムスか、

「要するに、戦争の災禍か、信仰心をも宗教心をも一切消滅させてしまうほと呪わしいものてあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.